

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 29 年 2 月 5 日	
所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	川口ゆり

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
日本、志賀高原、地獄谷
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
地獄谷におけるニホンザルの観察
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
平成 29 年 2 月 4 日 ~ 平成 29 年 2 月 5 日
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学 霊長類研究所 湯本貴和教授

<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
2 月 4 日から 5 日にかけて、京都大学霊長類研究所 湯本貴和先生、シドニー大学 David Raubenheimer 先生の地獄谷野猿公苑のニホンザル視察に修士 1 回生の榎原氏とともに同行させていただいた。地獄谷のニホンザルは雪深い冬、温泉に浸かる。欧米の人にとってサルはジャングルにいるものというイメージが強いそうだが、この温泉に浸かるサルは世界的に有名で、年間かなりの外国人観光客が訪れる。私は今まで訪れたことはなかった。特に霊長類が専門ではない人がわざわざ海外からくる地獄谷に、日本の霊長類研究所で研究する学生が行ったことがないのは恥ずかしいと思っていたので、今回は良い機会だった。実際、今回訪れているのは優に半数以上が外国人観光客であった。地獄谷のサルは一日基本的に 3 回の餌付けがされている。そのためか、雪深い季節にもかかわらずたくさんのアカンボウがいた。また、餌付けはされているものの樹皮や芽を食べるサルも見られ、「スノーモンキー」の厳寒期の暮らし方が窺えた。



上：積雪の中を歩く

左下：樹皮や芽を食べるサル

右下：樹皮をかじるサル



## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

しかし、私の一番の目的は温泉に浸かるサルを観察することである。温泉には一個体もないときもあったが、たいていは数個体が入っていた。多い時では20個体が入るときもあった。これほどの個体が温泉につかるのは珍しいそうである。また、温泉に入ることができるのは有意な家系のサルだけらしい。温泉は42度とのことである。どのような姿勢で入っているのだろうと思ったが、たいていは普通の休息時にみられる二本足でしゃがむような姿勢だった。アカンボウは二足で立っていることが多く、二足歩行することもあった。湯中では肩までしっかりつかって目を閉じているか、グルーミングをしていることが多かった。また、温泉を飲むサルも見られた。温泉からは硫黄臭がしており、サルが温泉を飲むのは温度を好んでなのか、温泉のミネラルを好んでなのか疑問に思った。入浴する行動について気になったことがある。温泉を出るタイミングはいつか、ということである。優位のオスがやってきて温泉の外へ逃げるということもあったが、それ以外はおもむろに温泉からあがっていった。時間を計測し損ねたが、多くの個体が比較的長時間湯につかっていた。十分あたたまったと感じたら湯から上がるのだろうか。のぼせないのか。調べたところ、温泉の縁に手を載せる姿勢をよく取るが、手が放熱器の役割を果たしのぼせないという(ただ実際はそのような姿勢を取る個体は一部だった)。さらに気になるのは、湯から上がった個体は濡れそぼち、温泉に浸かる前以上に寒そうに見えることである。しかし、これに関しても後に調べたところ、サルは汗腺が少ないこと、水が毛に浸透しにくいことにくわえ血管が急速に収縮して熱を逃がさないという寒冷地特有の仕組みがあるため湯冷めしないということらしい。(参考:「毎日新聞イチからオシえて」

<http://mainichi.jp/articles/20160106/ddm/013/040/009000c>

また、温泉とサルと聞いて思い出すのは二年前に米国 Lincoln Park Zoo でみた、日本モンキーセンターから渡ったニホンザルとそのために作られた温泉である。当時冬だったが、サルはまだ温泉を使っていなかった。浅すぎるからかもしれない、という話にそのときはなったが今回の温泉も子ザルの頭が余裕で水面から出るくらいだったのでそれほど深くなかった。Lincoln Park Zoo の温泉はどのくらいの水深だったのだろう。あちらも十分寒かったが、向こうのサルが温泉を利用しなかったのは温泉に入るのが地獄谷特有の「文化」だからなのだろうか。そのようなことを考えながら地獄谷を後にした。

今回、両日約3時間ずつしっかり地獄谷のサルを観察することができた。短期ではあるものの熱帯などでのフィールドワークは経験があったが、寒冷な土地での観察は初めてだったので慣れないこともあったが、今回の観察は非常に有意義だった。日本のイメージ写真として使われることの多い「雪の中で温泉に入るニホンザル」を自分の眼で見るとは非常に重要なことだったと思う。さらに、霊長類以外にも様々なことに精通しておられる湯本先生、David 先生と道中お話しできたのも良い経験だった。例えば、「甘酒」、「こんにゃく」など私には英語で何と説明するのか到底わからないような日本の食材も湯本先生はスラスラと説明されていたので勉強になった。食材にしても、ニホンザルにしても、日本特有のものを海外の方に正確に説明できるようにになりたいと思う二日間であった。



気持ちよさそうに温泉に浸かるサル

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



温泉を飲むニホンザル



湯から上がったばかりのサルは寒そうに見える



基本的な姿勢(ただしもう少し深く浸かっていることが多い)



親子で入浴するサル



親子とみられるカモシカもみられた

6. その他 (特記事項など)

同行者の方、特に湯本先生には大変お世話になりました。ありがとうございました。ならびに、今回の観察はPWSプログラムの支援を受けて行われました。厚くお礼申し上げます。